

旭川流域の文化・たたら製鉄と旭川

旭川流域ネットワーク 竹原 和夫

1. はじめに

岡山県には、東から吉井川、旭川、高梁川と3本の一級河川が北から南へ流れています。

旭川は、岡山・鳥取県境の大山脊梁山脈である蒜山三座、その南に位置する中国山地に源流を頂き、県の中心部の吉備高原地区を流れ県都の岡山市で瀬戸内海に至る全長142kmの河川です。

旭川流域ネットワークは、平成9年の河川法改正を契機に発足し、すべての支流に「川守」を育てるという目的で、毎年旭川源流の碑を建立しています。旭川源流の碑は、建立地の山で切り出した原木を自分たちで彫り、それをリヤカーに乗せて、流域各地を引き継いで河口に下り、再び建立地まで運ぶ約400kmの「リヤカーの旅」を16年間続けています。

「リヤカーの旅」は、毎年8ヶ月間毎週、旭川とその支流を見ながらリヤカーを引いて歩き、引き継ぎのあと地域の皆さんと交流懇親会を開催しています。懇親会では、各地域の歴史や文化、そして現在



の地域の話題等について、いろいろなお話を伺うことができます。本稿では、旭川流域のたたら製鉄と旭川についてご報告させていただきます。

2. 流域の地形

旭川流域の山頂高度は、1,000~1200m程度の蒜山・中国山地、300m~600m程度の吉備高原、300m以下の瀬戸内丘陵群の大きく三段に分れています。丁度JRの姫新線が走っているところが大きくくびれて中国山地と吉備高原の境で、盆地が形成されています。また吉備高原は西が高く東と南にいくにつれて低くなり、瀬戸内丘陵群の間には平野が広がっています。最下流の平野は、沖積平野と江戸時代、明治時代に行われた干拓により形成されているものです。中国山地の北にある蒜山は、火山岩類（玄武岩、安山岩）、中国山地は花崗岩、そして吉備高原は粘板岩、泥質片岩、砂質岩が多く、瀬戸内丘陵群は花崗岩の多い地質形状となっています。

また、今では杉や檜の人工林が多くなっていますが、中国山地の標高の高いところではブナの群生があり、花崗岩を主とする地域にはコナラ、クヌギ、カシ等の落葉広葉樹が多い植生となっています。ま

た、赤松の分布もまだ残っています。

3. たたら製鉄

このような特徴から、中国山地では風化した花崗岩を谷川の水を使って砂と粘土と砂鉄に分離させる鉄穴（カンナ）流しという方法でたたら製鉄の材料にする「砂鉄」を採取していました。この地域の製鉄の歴史は古く、延喜式にも「備前、備中、備後、美作、出雲、伯耆の六ヶ国が質量共に優れている」と記述されているそうです。鉄穴流しのため作られた沈殿池が、棚田の元になったという記述も残っています。（旧中和村等）これらの作業に関わった人たちの多くは非農繁期の農民であり、田んぼに水を入れる時期には、稲作に支障があるため秋から春にかけての寒い時期に行われていました。鉄穴流しは、濁流となって大量の土砂を旭川に流し、下流に運ばれ、下流部の沖積平野が形成され広大な農地が形成されていったのです。また、たたら製鉄には、大量の木炭を必要としますが、この木炭の材料となるコナラ、クヌギにも恵まれていたことが、たたら製鉄を盛んにした理由でもあります。鉄を加工する鍛冶に使われる炭は松、栗、杉が良いとされていますがこれらの炭の材料も豊富でした。中国山地の南部の盆地（現真庭市勝山、久世等）には鍛冶屋が多く存在し、鋤、鍬、鎌等の農機具や鍋、釜等の日用品を作っていたようです。勝山の町並みを歩くと今でも鍛冶屋の跡であることが分かる大きな砥石や、木製のフドのある煙突が残っている家もあります。その由来がくみ取れる地名（鍋屋、鍛冶屋等）も残っています。

また、上流の真庭市勝山まで高瀬舟が運航され、上流からは鉄や薪、炭が、下流からは塩が運ばれていたようです。ただ、美作の国の主な産品は、真庭市落合からは、陸路で吉井川へ運ばれ、牛窓港から近畿に運ばれていたようです。備前の国の通過を避けたのでしょう。

この高瀬舟も水田に水を引く時期には旭川にたくさんの堰が設けられるため秋口から春先にかけての運行だったようです。近世になり常置される堰ができてからは堰に高瀬通しが設けられ舟を通過させたようで、今でもその石張りの船通しが残っています。（岡山市牟佐）

たたら製鉄のため伐採された自然林の後には、杉、檜が植林され、ミツマタやワラビ、山芋、松林の松

茸も多く生産されました。木材は、筏を組んで旭川を流し、下流に運んで阪神市場に出荷されていたようです。筏流しは、道路交通の発達と旭川ダムの建設（昭和29年完成）により完全に姿を消しました。流域には多くの製材所がありました。しかし、輸入材に押されて国産材の需要が少なくなり、今では製材所の数はごく僅かになっています。一時は下流の瀬戸内海に運ばれてきた輸入木材を、トラックで中流域までの運び製材をするという時期もありましたが、最近は何れも伐採された国産材の製材が見られるようになりました。また、電気、ガスの普及により薪炭、木炭の需要も無くなり、落葉広葉樹の伐採が行われなくなりました。管理の行われない人工林とともに山の力が失われる原因となっています。

4. 吉備の国、美作・備前・備中

岡山は、古くは「吉備の国」の中心となっていました。その吉備の国が「備前」「備中」「備後」の三つの国に分かれ、後に奈良時代に出雲街道の完成と共に「備前」の北部地域が「美作」の国に分国されました。旭川流域の上流は、「美作」、途中「備中」の一部地域の流域が加わり、中流域からは「美作」「備前」の地域を流れています。

旭川の兩岸の国境にあった渡しには、船番所が置かれ、物資の移出入の取り締まりや運上銀を徴収していたようで、その跡を示す石碑が残っています。（旧建部町、岡山市牟佐等）国境を守る陣屋町の町並みを残しているところもあります。（旧建部町中田地区）平成の大合併でも、合併について、町の真ん中を流れる旭川で左岸地域は「美作」右岸地域は「備前」で町が二分される首長戦が行われました。

特に出雲文化の影響を根強く残す上流域の「美作」と江戸時代に質実堅固の藩政を行った下流の「備前」ではかなり趣が異なり、今でも地域の行事等に大きな影響が残っています。お祭りを例にすると、美作の国では、氏子総代が集まり、祭りなどを運営する「宮座」があるが、備前にはそのようなものが無く、備前の祭りは少なく極めてこじんまりしています。江戸時代に池田光政が行った、歌舞音曲の規制が影響しているとも言われています。たたら集団は山中の厳しい作業を癒すため豊富な資金で歌舞伎等の芸人集団も抱えて移動していたと言われ、その名残として美作の国には神楽や田舎芝居を楽しむ風土が形成されたのではないかと想像します。また、お祭りが盛り上がるのは出雲文化の影響も大きいと思います。中、上流域では荒神信仰も根強く地域をあげて草刈り等を行い、小さな社を大切に守っているところが多くあります。懇親会でも地域の特徴が出ます。出雲文化の影響が今なお残っている地域では、懇親

会が盛り上がり、最後は公会堂等に設置されているカラオケまで楽しめます。川の浄化を目的として始められたホタル祭りでも踊りや歌が披露されます。今年は源流の碑の引き継ぎを荒神様と併せて行った地域もありました。引き継ぐ地区の皆さんが総出で迎えてくれ、一緒に食事をするのです。

また、国境はそれぞれの国の時の都合による政治犯が逃げ込む格好の場所だったそうで、三国の境のある真庭市旦土あたりでは、様々な国から集まった人達が独特の文化を築いたといえます。地形的に農地も少なく、高瀬舟の往来で入ってくる情報を元に学問に励み、その学問で生計を立てた多くの賢人を排出しているということも分かりました。

5. 今なお残るたたらに関わる技術

旭川清流ワークショップ（1999年）等で古代たたらを再現した縁で、刀鍛冶が日本刀を鍛錬するときには使う松炭が不足しているので協力して欲しいと日本刀匠会から依頼がありました。大きな炭焼き釜が三つもある美咲町江与味地区の皆さんと相談し、製材所の協力を得て原材料を確保し、お年寄りに日本刀の鍛錬用の炭を製造して頂くことになりました。生産を始めて6年位になりますが、今では長野県から九州までの刀鍛冶



の皆さんに供給されるようになりました。昨年炭焼き釜を増設しましたが、いくら焼いても間に合わない状況になって

います。技術を持つお年寄りの収入は、旅行代や、孫へのお小遣いに回り、親子三代が住む家族も増えてきたと言っておられました。

懇親会で使う鉄板焼きの炭は、岡山市御津大野の地区の皆さんと一緒に焼いた炭を使っています。木を選び伐採する技術と炭を焼く技術を持つ地域のお年寄りや、切り出された木を運び、釜入作業や釜出し等の力仕事を担当するA R - N E Tとの共同作業で、地域と私たちが約3年間使える炭を焼き上げました。



これからも昔の人達と同じように流域を歩きながら、各地の方と交流を進め、旭川流域の歴史や文化を学び、流域全体でお手伝いできる

ことを探り、協同で実施し、貴重な歴史的な技術を継承できるようにしたいと思います。